

第11回 6/23

「CMカメラマンから見た 映像制作の現状と課題」

金 利明（きむ・いみよん）先生

カメラマン FRE-X MANAGEMENT OFFICE 所属

在日コリアンとして日本で生まれ、福岡で育つ。
日本映画学校卒業後、映画、ドキュメンタリー、PV、
CM等のカメラマンに。
ACC（全日本シーエム放送連盟）グランプリ受賞。
アジアパシフィック広告賞 金賞。
現在、東京在住。

参考HP <http://www.kim-imyong.tv/>



《講義概要》

CM制作のカメラマンとして、多くのCMを手がける金利明氏が、映像制作の現場の現状と課題について講義を行った。

講義ではまず、実際に金氏が携わったCM作品を上映し、そのうちのいくつかのCMについての制作の裏話も交えながら、CM映像制作の仕組みについて詳しく解説。撮影の役割分担や撮影手法、カメラの選び方、さらには現場の実情まで具体的に示し、CM撮影の奥の深さやその魅力を学生に伝えた。

また、撮影機材のデジタル化により、フィルム撮影の技術が受け継がれないことやアナログ時代にはあった「人間らしい温かみ」が失われていくこと、制作者同士のコミュニケーションが希薄になっていくことなどを指摘。変化する映像制作のあり方に警鐘を鳴らすとともに、撮影には技術だけではなく人の心が大事であることも併せて伝えた。

最後には、金氏自身が映像の世界を目指したきっかけをありのままに話し、過去を正しく知ることが未来へつながるという考え方や、映像を通してこの世の中を変えたいという志を示し、学生に強くメッセージを残した。

《受講生の感想》

●CM 作りの過程などを聞くうちに CM のエンタテインメント性の高さを強く感じました。何十秒単位で視聴者にインパクトを与える作品を仕上げなければならないといった点を考えると、CM 制作は非常に大変な仕事ではあるけれど、とてもやりがいのある面白い仕事なのではないかと思いました。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

●フォンテーヌの CM の話の中で「アナログは人間らしい温かみがある」とおっしゃっていましたが、これは何においても言えることだと思いました。デジタル化で世の中はどんどん便利になっていく中で、失っているものもたくさんあるのだと思います。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

●1 本の CM 制作にどれだけのスタッフが必要で、どのようにつくり上げていくか、数字も明確に説明してくださったので、流れがよくわかり、とても面白かったです。そして、デジタル化が進む中、フォンテーヌの CM はアナログで行ったということや、カメラを選ぶ基準なども知ることが出来て良かったです。

立命館大学・映像学部・3 回生

●映像を通して差別をなくせるんじゃないかという志は素晴らしいと思うし、僕もそれは可能だと思う。過去と現在を正しく認識することが未来につながるという話に感銘を受けたし、映像と結びついてこんな話がきけてよかったです。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

●アナログからデジタルへの移行による弊害というか、影響が現場に与えたショックが想像以上に大きくて驚きました。ただ、映像を撮るには心が必要という言葉に、アナログ時代を生きてきた先生のプライドや誇りを感じたように思います。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

●CM が地道な積み重ねによってつくられていて、15 秒の映像をつくるのも大変なことはなんとなく知っていたけれど、撮影の仕組みを聞いて自分が想像していた以上に神経を使うし、経験が必要だということがわかりました。これからは、デジタルの流れの中で、自分の気持ちや人間らしさを大切にして映像にしていくことが必要だということがわかりました。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

